

1 た・づ・な

「乗馬で活躍」



日本中央競馬会
馬事公苑 苑長

本城 敬文

昨年3月に馬事公苑長に就任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

BTCニュースの読者の皆様は、日本における年間のサラブレッド生産頭数が約7,400頭（正確には2007年7,414頭；以下文中の頭数は2007年のデータ）であることはよくご存知のことと思います。この馬たちは約2年間の育成調教期間を経て競走馬になるわけですが、現役競走馬頭数はJRA8,072頭、地方競馬12,696頭で合計約20,000頭です。それに対し、乗用馬は年間国内生産142頭に過ぎませんが、乗用馬頭数は14,183頭（乗用馬または競技馬として登録のある頭数）と結構な数になります。国内生産は全体から見れば小数なので、ではほとんどが輸入馬かということ、年間輸入頭数もほぼ同数の145頭しかありません。わが国においては、乗用馬のなんと7割にあたる約10,000頭は元競走馬なのです。非常に多くの競走馬が、現役引退後の第2の人生（馬生）を乗馬として活躍している実態がここにあります。JRAだけでも2007年度5,331頭の競走馬が引退し、その内1,440頭が乗馬の道に進んでいます。

ただし、馬術競技馬に限定すると、元競走馬は35%、内国産乗用馬26%、外産乗用馬35%となり、一気に外産乗用馬の割合が大きくなり、元競走馬の割合は小さくなります。（不詳4%）

乗馬の世界も競走馬同様血統が重視され、能力の高い競技馬は数千万から数億円の値が付きまます。残念ながらわが国の乗用馬生産は海外に比べると質・量とも格段の差があります。しかし、長年の関係者の努力により、近年では内国産乗用馬のレベルは向上し、なんと昨年は岩手県遠野産のハリーベイ号（日本スポーツホース種）が本場ヨーロッパの国際馬術競技大会で優勝することができました。とはいえ、わが国のトップクラスの馬術競技会（競馬でいう重賞競走クラス）で活躍するほとんどの馬は、海外で乗馬用に生産調教された馬です。下級条件の競技会には元競走馬はたくさんいますが、トップクラスにはほとんどいません。（2002・2003・2006年に全日本大障害選手権優勝のトップギア号（ビゼンニシキ×スピードウォーク；大井競馬12戦3勝）といった例外もいますが。）

そこで、馬事公苑ではこれら多くの元競走馬と内国産乗用馬の活躍の場を提供し、その活動を盛り上げるために、昨年10月10・11日に第1回JRAジャパンプリーディングホースショー（元競走馬を含む内国産乗用馬の障害馬術競技大会）を初めて開催しました。開催前はどれだけ参加馬が集まるか不安だったのですが、ふたを開けてみると何と馬事公苑の滞在馬房が満杯となり、41団体130頭、2日間で延672人馬の参加となる大盛況でした。

それだけ多くのニーズがあるのだということをおぼろげに知ることができました。この大会は今後も継続して開催し、競走馬の引退後のさらなる活躍と内国産乗馬振興のために役立てたいと考えております。

前述のとおり、元競走馬でも乗馬として大活躍している馬もいるわけですが、ではどのような馬が乗馬に向くのでしょうか。

一般的に言われているのは、おとなしい馬ですが、ただおとなしいだけでは初心者には良くても上のクラスには行けません。乗馬でも大成するには肉体的な能力と賢さも必要です。スピードとスタミナに恵まれ、馬場に出る前からハイテンションでカリカリしていても身体能力だけで勝つことのできる競走馬もいますが、たいていの馬は勝負の前にエネルギーを消耗してしまいます。競馬で勝つためには走る能力が高いことはもちろん必要ですが、精神的にオン・オフの切り替えが容易ですぐに緊張がほぐれて折り合いが付き、ゴーサインが出たら直ちに反応できる馬が理想です。乗用馬に求められる資質も全く同じなのです。

また、乗馬で大成する元競走馬には、オープンクラスの馬が多いとも言われますが、必ずしもそうではなく、バンコクアジア大会総合馬術競技優勝のオンワードシーザー号（メンドス×オンワードソース）は1戦未勝利、ソウル・バルセロナ両オリンピック障害馬術競技出場のシルキーウェイ号（シルバーランド×タイセイランド）は20戦1勝です。競馬で好成績を残せなくても、全ての馬にまだまだ活躍のチャンスはあるのです。是非とも競走馬の育成調教に携わる皆様には、馬たちが生涯を通してその能力を遺憾なく発揮できるよう、肉体的なトレーニングはもちろんですが、口向きを含めた精神面での調教にも心血を注いでいただけますよう心からお願いするしだいです。